

県央史談会史跡めぐり

伊勢原市上粕屋方面

令和5年(2023)9月10日(日)

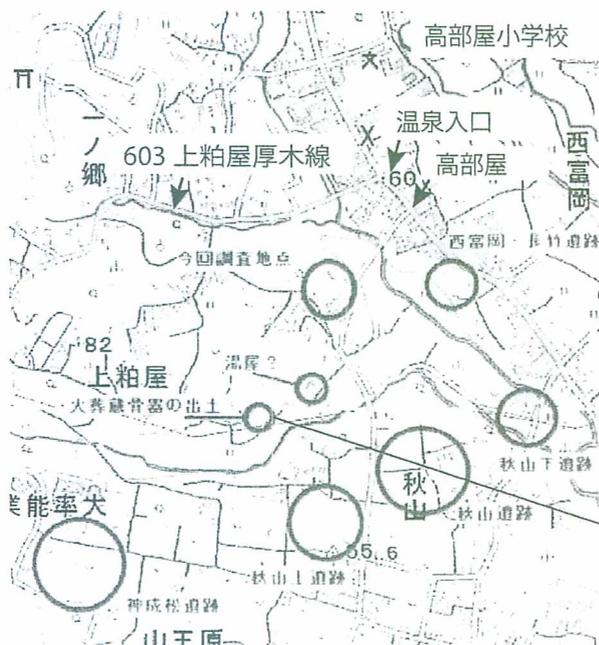


かみかすや わだうちいせき
上粕屋・和田内遺跡の発掘調査

伊勢原市上粕屋に所在する上粕屋・和田内遺跡では、一般国道 246 号（厚木秦野道路）建設事業に伴う発掘調査で江戸時代から中世、平安時代といった各時代の遺構や遺物が発見されています。

江戸時代の遺構としては「屋敷」を囲んでいたとみられる溝や道跡、様々な形の土坑が発見されました。中世は後期（室町時代～戦国時代）とみられる遺構と前期（鎌倉時代）とみられる遺構の2時期の遺構が認められています。中世後期の遺構としては幅4m深さ2mの大溝が発見されました。中世前期の遺構としては柱穴群が発見されています。柱穴には底に石(根石)を置いたものも認められました。調査地点の近くには中世に建立された極楽寺があったとされ、これまで周辺で行われた調査では火葬骨を納めた中世の蔵骨器や湯屋とみられる遺構が発見されています。柱穴群や大溝も極楽寺に係わる施設かもしれません。

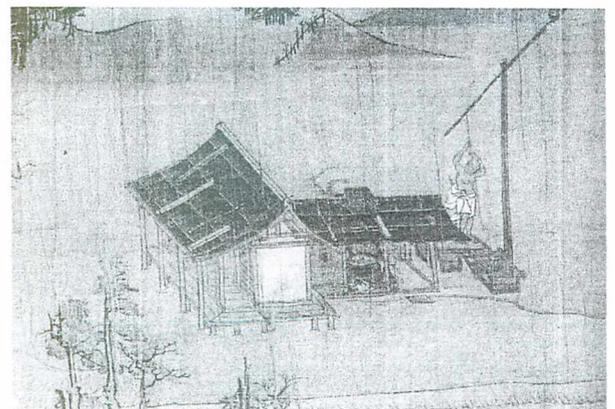
上粕屋・和田内遺跡見学会資料より（2019.7.13 かながわ考古学財団）



大溝（室町時代～戦国時代）幅4m深さ2m。江戸時代初めには完全に埋没。

旧糟屋氏一族石塔群→洞昌院へ移転

集落が廃絶した後、平安時代末から寺院として利用されていたようです。調査で平安時代末から中世初頭の瓦が出土していることから、うかがうことができます。調査地周辺は、平安時代末に創建された「極楽寺」が所在したという伝承が残る地域でもあります。今回の発見がそれに直接繋がるのかは、今後更なる精査が必要ですが、可能性があるといたえるでしょう。今回発見されたC1号石組み遺構は、第2次調査のC1～3号石組み遺構と一連の遺構と考えられます。火処、排水施設、貯水施設？（今回発見遺構）と考えられる遺構がまとまって見つかったのは貴重といえます。寺院におけるこのような施設としては、湯屋または風呂が考えられますが、厨（台所）などの可能性も考えられます。いずれにしても、このような特殊な遺構が存在することからも、調査地は寺院域であった可能性が高いといえるでしょう。



一遍上人絵伝 湯屋

伊勢原 中世 MAP

伊勢原市内では近年の発掘調査によって様々な時代の歴史が明らかにされてきています。今回は、特に成果が目まぐるしく「中世前期」（12世紀後半～14世紀）に見つかっている遺跡とお寺についてご紹介しましょう！

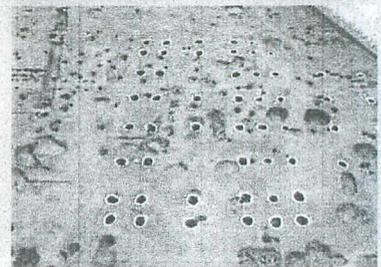
子易・中川原、上粕屋・子易遺跡

鈴川右岸に所在する子易・中川原遺跡では、鎌倉時代～南北朝時代の屋敷跡が見つかっています。3000基以上の柱穴が検出され、掘立柱建物跡はこれまでに計20棟を確認しています。また、3間×4間の礎石建物跡（本堂）を中心とする中世寺院跡やその前面に広がる池状遺構も発見されています。

鈴川の対岸にあたる上粕屋・子易遺跡でも、鎌倉時代の掘立柱建物跡が4棟以上確認されており、大きな屋敷跡があった可能性が考えられます。



子易・中川原遺跡 6-2 工区 中世面全景（東から）



上粕屋・子易遺跡 13-3 工区 C3号掘立柱建物跡近景（西から）

池状遺構からは呪符木簡が出ているんだ。子易・中川原遺跡は、屋敷跡・寺院跡といろいろ見つかっていて、伊勢原市の中世の歴史を考える上でとても重要な遺跡なんだよ！

池状遺構からは呪符木簡が出ているんだ。子易・中川原遺跡は、屋敷跡・寺院跡といろいろ見つかっていて、伊勢原市の中世の歴史を考える上でとても重要な遺跡なんだよ！

湯屋ってなあに？

湯屋とは昔のお風呂のことで、今のようにお湯につかるのではなく、「掛け湯」または「サウナ」のようなお風呂です。お坊さんの修行の一環として使われていたようです。

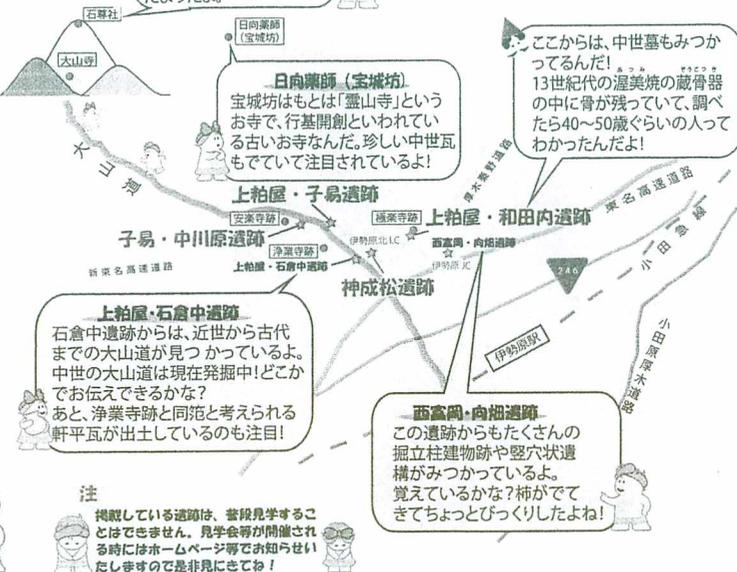


これは『一遍上人絵伝』にある湯屋の絵だよ。今のお風呂とちょっと感じが違うよね。

和田内遺跡にあったのもこんなだったのかなあ。

石尊社

大山信仰は古代からあるようだけど、中世の段階でも源頼朝さまの厚い信仰があったようだよ。



日向薬師（宝城坊）宝城坊はもとは「靈山寺」というお寺で、行基開創といわれている古いお寺なんだ。珍しい中世瓦もでて注目されているよ！

上粕屋・子易遺跡

浄業寺跡

伊勢原北IC

西宮岡・向畑遺跡

伊勢原IC

神成松遺跡

伊勢原IC

注 視察している遺跡は、普段見学することはできません。見学会等が開催される時にはホームページ等でお知らせいたしますので是非見におこね！

～兄弟瓦のお話～

子易・中川原遺跡から、南へ500m程離れたところに浄業寺跡があります。浄業寺跡は、建仁元（1201）年北条政子により浄土宗の寺院として建立されたといわれる寺院で、現在は明治時代の廃仏毀釈によって存在していません。発掘調査によって、中世のお寺の遺構は確認されませんでした。貿易陶磁や瓦などから、中世段階にはお寺があったと考えられています。浄業寺跡からは、2種類の軒丸瓦が出土していますが、そのうちの1種類と子易・中川原遺跡から出土した軒丸瓦が同じものであることがわかりました。巴文中心の同じ位置に「范傷」があること、巴のしっぽの先端に細かい珠文が配置されていることから同じ范でつくられた「同范瓦」であることがわかりました。離れた地で同じ范型を使う瓦が出土する背景には大きな意味があります。浄業寺跡と子易・中川原遺跡の間にはどんな関係があったのでしょうか。謎はさらに深まります。



3つの小さな珠文帯

范傷

浄業寺跡出土軒丸瓦 ※2



らいさいね！

子易・中川原遺跡出土軒丸瓦

違う場所から同じ瓦がでてくるなんてすごい！

和田内の湯屋遺構の記事は『発掘帖第26号』をみてね！

上粕屋・和田内遺跡

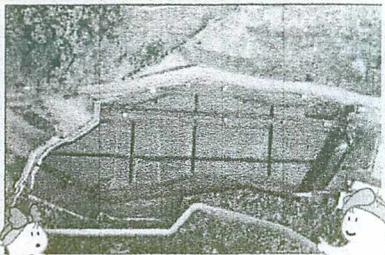
上粕屋・和田内遺跡では、「湯屋」と考えられる遺構が見つかった他、掘立柱建物跡や竪穴状遺構が確認されています。この遺跡からは古代末～中世初頭と推定される軒瓦が出土していますが、この時期の瓦の類例は県内でも少なく貴重な瓦です。糟屋盛季が建立したといわれる「極楽寺」に使用された可能性が高いといえるでしょう。



軒平瓦の凸面は縄叩き！これって中世の段階では鎌倉の水福寺ぐらいしか県内にはないんだよ！

神成松遺跡

神成松遺跡では幅30～50mの狭い谷の内部で、棚田状に連続する水田が見つかりました。水田遺構の埋め土からは、同安楽系青磁碗など中世前期に相当する遺物が出土していることから、伊勢原市内一帯が「糟屋荘」と呼ばれた安楽寿院の荘園であった時期の遺構と考えられています。



「糟屋」としての炭化種実が見つかった他に、糟の珪酸塩が見つかったんだって！

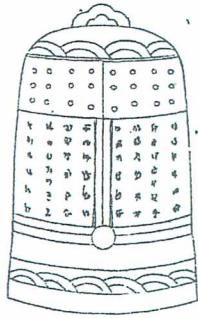
何が見つかったの？

糟屋氏ってだあれ？ 安楽寿院ってなあに？

中世前期と呼ばれる時代は、「糟屋氏」が伊勢原市内を治めていたといわれています。「糟屋氏」とは、藤原氏の一族で、平安時代末頃に藤原良方の子・元方が相模守として東国に下向し、そのまま土着して「糟屋」と名乗ったといわれる氏族で、源頼朝の家臣として活躍しましたが、建仁3（1203）年の「比企氏の乱」によって衰退していきました。安楽寿院とは、京都・伏見の鳥羽離宮の一つである仏堂が前身の寺院で、創建は保延3（1137）年とされています。このお寺の荘園が「安楽寿院領」と呼ばれる荘園で、伊勢原市内の一帯が荘園のエリアだったと考えられています。糟屋氏が最初に「糟屋荘」という荘園をつくり、後に、安楽寿院に寄進したことが文献等から明らかにされています。実態がよくわからなかった伊勢原市の中世前期ですが、近年の発掘調査によってこの時期の遺構や遺物が多くみられるようになり、徐々に明らかにされてきています。

※1～3の遺物写真は神奈川県教育委員会所蔵資料です。 ※4は国立国会図書館ウェブサイトから転載しました。

糟屋荘と糟屋氏



高二尺八寸、廻六尺徑
一尺六寸五分厚二寸

別当極楽寺 渡打鐘銘には渡山と号す
曹洞宗洞淵院末本尊阿弥陀往昔糟屋
盛季の起立せし事前に注記せし鐘銘
に見えたり中興開山目堂留存本寺二
世元龜三年(1572)六月六日卒今は衰微し
て庵室の如し

『新編相模国風土記稿』

新編相模國風土記稿卷之四十四

村里部 大住郡卷之三

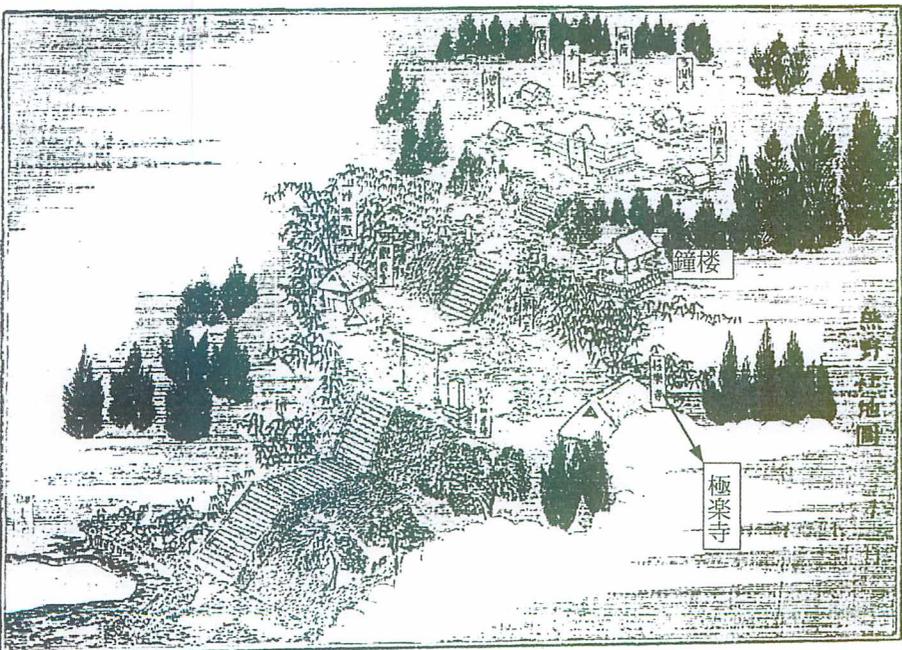
糟屋庄

○上糟屋村 夜半良 古書に、或は糟谷と書す、郷名を唱へず、按ずるに、下糟屋村は、古高部屋郷と、唱へしと傳ふれば、此村も其唱へありし事知べし、元暦元年九月、源頼朝先例に因て、此郷を大山寺領に寄附す、大山寺藏文書曰、下高部屋郷、可早任先例引募大山寺島等事、右件田島、任先例無相違、可奉免之狀如件、放下、元暦元年九月十七日、袖判、當所は、糟屋庄の本村なり、土人の傳へに、往昔糟屋藤太と云、後左兵衛尉 有季、居住の地なりと云、居蹟、下村 村内熊野社に、建久七年、有季願主にて、鑄造せし鐘あり、其銘に大住郡之邊有二伽藍、名極樂寺、按ずるに、別當 濫 篤季舊、劫驗日新、蓋乃曾祖父藤原盛季之福田也、云々とあり、又糟屋系譜に、左大臣冬嗣の孫元方、糟屋庄大夫と稱し、其子久季は、糟屋庄司と載す、是等に據るに、元方初て庄内に住して、在名を以て稱號とし子孫聯綿と

新編相模國風土記稿卷之四十四 村里部 大住郡卷之三

三六五

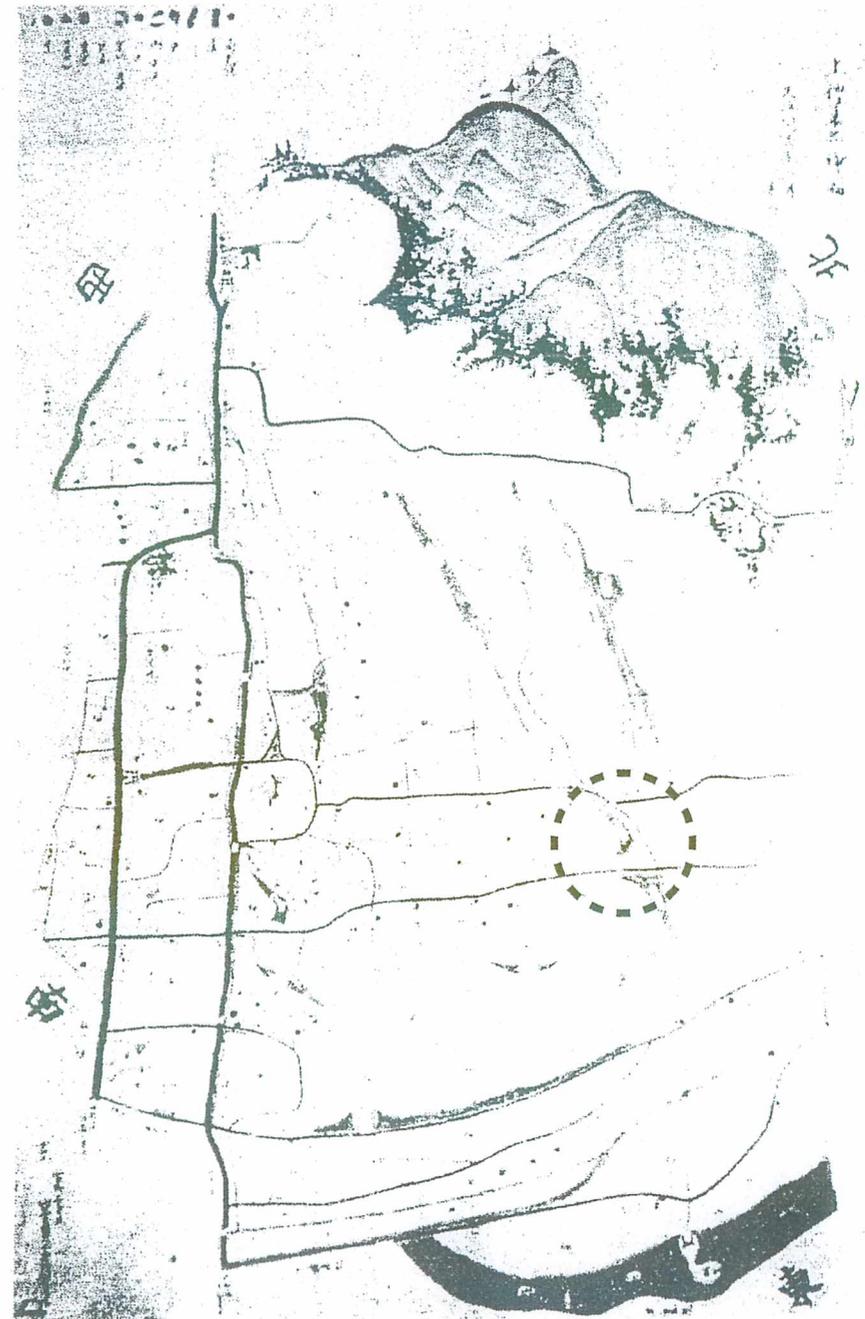
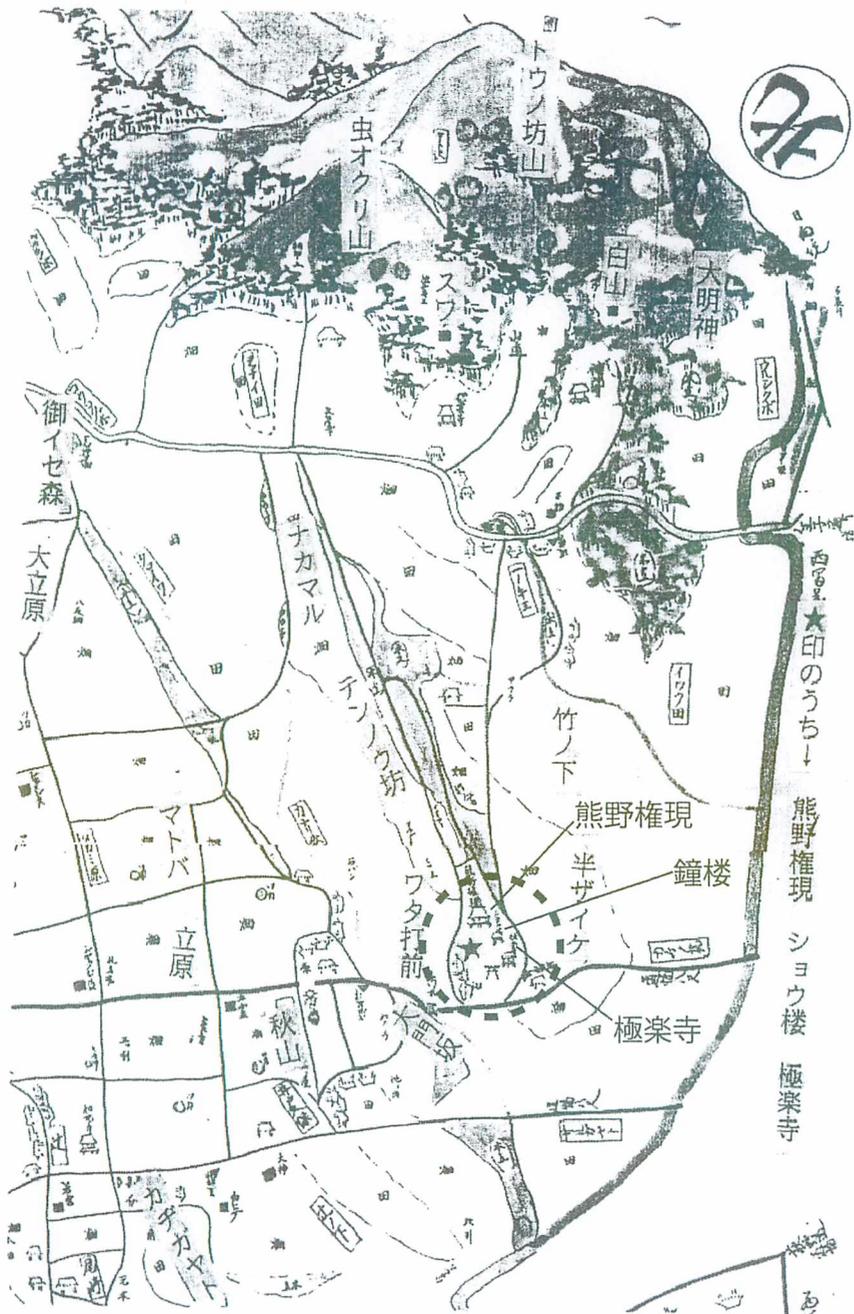
此邊を領せしなり、【東鑑】「源平盛衰記」其外諸書に、糟屋氏の人、多く所見あり、糟屋権頭盛久、權頭重國、左衛門三郎行村、三郎宗秋等なり、尉有久、左衛門尉久季、左衛門三蓮華寺過去帳に、糟屋氏の人多く見ゆ、皆元方の子孫なるべし、人物部に、觀應の頃、當庄に政所ありし事、鎌倉園覺寺藏文書に見えたり、曰、正續院領、相模國石田庄内津奥致濫妨畢、早葦彼所、退狼藉人等、可全寺家知行由、可下知糟屋庄政所之狀如件、觀應二年十二月六日、上杉宮内大輔殿、直義華押、按ずるに、政又古當國金山寺 今國中に此寺號を聞かず所の蹟詳ならず、 又古當國金山寺 廢寺となりしならん、領、此邊にあり、【禪林僧傳】、不聞和尚行狀曰、師諱契聞、號不聞、武州川越人、云々、樞密使源義経、請住相之金山寺有糟屋莊田、爲蒙、寶徳三年、或は二年と、奪、十有二年、師諱於官歸其侵、 太田備中守資清、長尾左衛門尉景仲、由比濱鎌倉にて千葉新介・小田謙岐守・宇都宮肥前守等と戦ひ、資清・景仲敗北して、庄内に引退く、【鎌倉大草紙】曰、太田備中守・長尾左衛門尉・謙倉の御所へ押寄ける云々、敵は大勢にて、由比濱へ押來間、味方千葉新介・小田謙岐守、宇都宮肥前守、四百餘騎にて馳向ひ、散々に追散攻戰ける、太田備中長尾左衛門が郎等百廿餘人討死して、陣床も取得ず、相州糟屋の庄へ引退く、 文明十七年九月、僧萬里此地に止宿す、【梅花無盡藏】曰、九月晦日 出關本宿糟、 此村上下二村に分ちし、年代詳ならず、されど天正十九年、村内の神社に賜りし御朱印に、上糟屋郷と記されれば、其頃既に上下の唱ありしなり、今間部主殿頭。



『新編相模國風土記稿』大住郡 糟屋庄

此寺安八幡祠坂東之一林村有相摸入道時頼之碑糟谷綿打村綿打明神之祠下有寺曰極樂寺有鐘建久七年之物

『游相日記』
(厚木市教育委員会)



上糟屋郷絵図(部分) 文政8年(1825) 右図の部分
氏・渋谷党より転載

湯山学『相模武士全系譜とその史蹟』五 糟屋

上糟屋郷絵図 文政8年(1825) 奥富敬之「相模国糟屋荘の開発過程」(竹内理三編『荘園絵図研究』) 東京堂出版一九八二より転載

極楽寺鐘銘 并序

相模國之内大住郡之邊有一伽藍
名極楽寺蓋錫李舊勳驗自勤益
乃曾祖父藤原盛季之福田也
弟子左兵衛尉有季再先祖之本

願思當寺之興隆遂時修葺添設
嚴道場之具於此倫焉真俗之聲亦
復之矣箇中攸闕洪鐘而已是以
殊課鑄工專抽微力二音初報十
此善業通向于彼衆主上自有願焉無

間慮訛言聞校昔之利遍被毒誘自覺
與樂之誠遂軍力時逢冬令歲次
丙辰夏四月十八日卯作銘曰
亂起心相 避過雲通 夜漏發毒
晚更破夢 罪隨聲滅 福應聖家
一念銀信 三時捷功 諸大有福

悲地無堂 居肆屠者 臨流釣翁
閑穢障障 忽識圖軸 杖苔云洽
利生區弱 犯胎遺化 禽獸魚豕
逸損放及 良緣可同 誰輕此品
已用多金 便是神力 豈思鑄工
作銘者文章生三善宣衛

清書金剛資僧覺然
鑄師廣階忠次

相模國秋山村極楽寺鐘銘

極楽寺鐘銘并びに序

相模國の内大住郡の辺に、一伽
藍あり、極楽寺と名づく。濫觴
として旧く、効験日に新たなり。

蓋し乃曾祖父藤原盛季の福田な
り。弟子左兵衛尉有季先祖の本
願を尋ね、当寺の興隆を思う。
遂に修復を致し、添うるに道場
を莊嚴するの具を以てす。此
に於いて備われり。真俗の望み、
亦足れり。この中欠くところは、

洪鐘のみなり。ここを以て殊
に鑄工に課し、専ら微力を引き
んで、一音始めて報ず。(中略)
時に建久七年(1196)歳次丙辰夏四月
十八日丁卯(中略)已に多く銅
を用う。便ち是れ神力なり。豈
鑄工を思わんや。

作銘者文章生三善宣衛
清書金剛資僧覺然
鑄師広階忠次

※ 鐘は明治維新の神仏分離に
より消失した。

極楽寺鐘銘(『集古十種』所収)と読み下し(『伊勢原市史』古代中世資料編)

有季は極楽寺の堂宇を修復し、堂内の仏像・仏具を新造しこの梵鐘を施入し事業を完遂した。室町時代末には衰微したが戦国時代
目堂韶存が再興したものの再び衰え幕末には庵室の如くなっていた。明治6年(1873)には上粕屋神社に合祀された。

極楽寺跡西方に糟屋一族の墓とされる五輪塔、宝篋印塔(板碑2、五輪塔13、宝篋印塔1、卵塔5・船形塔婆3(近世))があ
ったが洞昌院へ移された。

福田 菩提寺

真俗 仏の教えと世俗の教え

三善宣衛 文章生。行政事務を担当する京下りの側近官僚。

金剛資僧覺然 飯山金剛寺の僧か。(小沢幹『伊勢原史話第1集』)

鑄師広階忠次

広階氏は古い河内国の鑄物師である。建長4年(1252)鎌倉長谷の大仏鑄造に招かれて参加したのは丹治氏・大中臣氏・広階氏
などである

河内鑄物師は、河内国丹南郡を本拠にしていた金属鑄造の技術者およびその集団。丹南鑄物師とも呼ばれる。活動の最盛期は平
安時代後半から室町時代前半で、日本各地に先進的な鑄造技術を広める働きをした。

河内国丹南郡一帯は、難波津と飛鳥を結ぶ古代の官道・竹内街道(丹比道)に近く、丹南鑄物師の前身は大陸からの渡来系の氏族
と推定されている。8世紀ごろには、すでに銅による鑄造が行われていたとみられる。

12世紀から15世紀にかけて、狭山郷日置荘(堺市東区日置荘付近)や現在の堺市美原区を中心に多数の工房を設置。中でも堺
市美原区大保を中心とする地域は、平安時代から室町時代にかけて、大保千軒といわれる河内鑄物師の一大拠点であった。鑄物師
たちは鑪のついた「こしき炉」を用い、鉄や銅で鍋や釜、鍬、鋤などの金属製品を多数鑄造した。とくに鍋は「河内鍋」と呼ばれ
て高級品とされた。また、その技術を買われて南都焼討で焼けた東大寺の大仏の修理や、鎌倉大仏の鑄造にも参加した。

河内鑄物師は、12世紀中ごろには、朝廷に鉄燈籠を献上したことなどによって鑄物事業を独占。蔵人所の燈炉供御人として課役
免除と通行自由の特権を得て、諸国を回り鑄造や鑄物の販売などを行った。日本各地の梵鐘の銘文には河内鑄物師の名が刻まれた
ものが多数存在し、12世紀～13世紀に鑄造された梵鐘の約8割にもものぼるといふ説もある。有力な氏族には広階、丹治、物部、
大中臣、草部などがあつた。

やがて、河内の鑄物の中心地は流通に便のよい堺周辺へと移り、これまでの本拠であった丹南郡での鑄造は衰退。八上郡の金太(金
田。現在の堺市北区金岡町)・長曾根や和泉国大鳥郡大鳥庄上条郷(堺市西区鳳付近)のほか、文明3年(1471)には摂津国住吉
郡の五カ庄(五箇荘。堺市北区東浅香山町付近)に金屋(鑄造所)があつた記録が見られるようになる。永禄12年(1569)には
織田信長の庇護を受けた今井宗久が五カ庄・遠里小野を支配する代官となり、自らの支配地に吹屋(鑄造所)を集めた(我孫子吹屋)。
ここで堺の鉄砲製造を担わせ、戦国武将たちに提供した。

関東における広階氏の作例は、弘長4年(1264)千葉県長生郡長柄町眼蔵寺(胎蔵寺)がある。

(ウィキペディア、堺市ホームページ、『厚木市史』中世通史編ほか改変転載)

〔糟谷系図〕

良方 大藏大輔正五位下
相州守護トシテ下向

常興
元方 父良方在國之時出生。於糟屋莊
成長。則号粕屋太郎。初下武家

盛孝 糟屋莊司
久季 糟屋次郎 家季 糟屋十郎兵衛尉 義忠 関本太夫
改名家忠

光綱 糟屋莊司 盛久 筑後守 從五位下 久綱 糟屋莊司 有季 糟屋藤太兵衛尉 義男也。比企判官 能員婿也。能員一乱之時切腹。 有久 後鳥羽院武者所 承久兵乱京方ニテ討死

光久 四宮 盛綱 民部丞 景綱 大山小太 季景 大山太郎 有長 乙石左衛門尉 女子 源有持妻 同討死 有近 三郎 女子 一条宰相 高能郷室

義久 新開 真重 新開荒次 泰重 次郎 季茂 朝岡三郎 景尚 大山小太郎 忠村 朝岡八郎

信季 白根三郎 某 伊木五郎 某 城所七郎 有政 大泉五郎 某 城所六郎

盛時 糟屋六郎 時村 三郎左衛門 大森与一 延時 糟屋左衛門 忠清 糟屋次郎 賴忠 同主馬助

某 城所六郎 某 城所六郎 某 城所六郎 某 城所六郎

盛時 糟屋六郎 時村 三郎左衛門 大森与一 延時 糟屋左衛門 忠清 糟屋次郎 賴忠 同主馬助

真忠 糟屋与二 行忠 糟屋修理 泰忠 修理亮 今川上総介 義政

真忠 糟屋与二 行忠 糟屋修理 泰忠 修理亮 今川上総介 義政

真忠 糟屋与二 行忠 糟屋修理 泰忠 修理亮 今川上総介 義政

〔糟谷系図別本〕
良方 從五位上大藏大輔 常興 從五位下 輔相 從五位上 如丘 從五位下加賀 元方 父在國ノトキ出產 盛季 糟屋莊司 久季 糟屋次郎
母百濟仁貞女 甲斐守 治部少輔 相模守護 号糟屋太郎

家季 十郎兵衛 義忠 関本太夫 改家忠

光綱 糟屋莊司 盛久 從五位下 筑後守 有季 藤太兵衛尉 比企 能員一同死

有久 後鳥羽院武者所 承久京方討死 有長 乙石左衛門 女子 源有好妻 重持母 有近 三郎 承久京方討死

久季 四郎左衛門尉 女子 一条高能室

季原 大山太郎 景尚 大山小太郎 季成 朝岡二郎 忠村 朝岡八郎

景綱 大山小太郎

母横山隆景女 母横山時広女 光久 四宮三郎 盛綱 民部丞 義久 新開次郎 直重 新開荒次 泰重 信季 白根四郎 某 伊木五郎

盛時 糟屋六郎 時村 三郎左衛門 某 大森与一 行村 左衛門三郎 此間中絶か

延時 糟屋左衛門 忠清 糟屋次郎 賴忠 糟屋主殿 真忠 年次郎 行忠 修理亮 泰忠 修理亮 仕今川範政

盛員 城所七郎 有政 大竹五郎 有基 小太郎 大力承久京方

某 櫛田平市 某 城所六郎

某 見田根与三 某 美波十郎

奥富敬之「相模国糟屋莊の開發過程」(竹内理三編『莊園絵図研究』)
東京堂出版一九八二

糟屋氏の熊野信仰

平安時代末期：糟屋荘→安楽寿院の荘園（私有地）。久寿元年（1154）立券され、盛季が庄司（荘園の役人）となる。鳥羽上皇は積極的に皇室領荘園を作り上げていった。

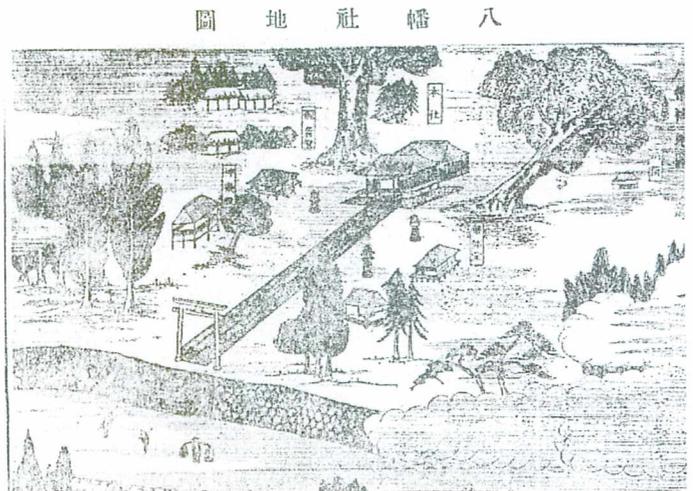
安楽寿院→鳥羽上皇の元離宮、大番役は糟屋荘の武士が交代で勤めた。鳥羽上皇の度々の熊野詣に供奉した結果、糟屋氏も地元へ熊野三社（本宮、新宮、那智）を勧請した。

糟屋有季の活躍

- 吾妻鏡：寿永3年（1184）一の谷参戦
- 文治元年（1185）鎌倉勝長寿院落慶法要、頼朝隨兵
- 文治2年（1186）義経家来佐藤忠信討ち取る
- 文治5年（1189）平泉藤原氏討伐参戦
- 建久元年（1190）頼朝上洛に随行
- 建久4年（1193）富士藍沢巻き狩りに随行
- 正治元年（1199）頼朝没
- 正治2年（1200）梶原景時一族を駿河国で討ち取る
- 建仁3年（1203）比企氏の乱で討死（比企能員の娘が有季の妻）
- 建暦元年（1211）西面の武士左衛門尉有久（後鳥羽上皇石清水御幸）

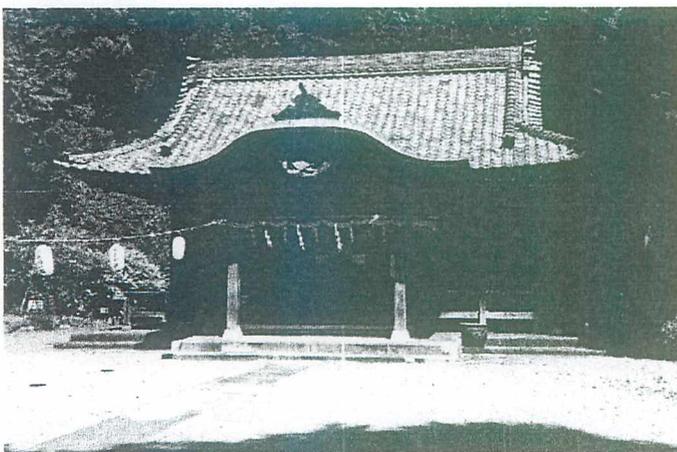
高部屋神社

下糟屋村
八幡宮 鎮守なり 延喜式に載たる当国十三座の内
高部屋神社なり
社前に応永廿八年（一四二一）の石燈籠あり、銘曰
奉彫相州糟屋惣社（中略）当庄秋山郷地
鐘楼 鐘に至徳三年（一三八六）の銘あり 曰相州
大住郡糟屋庄惣社（中略）大工河内國宗
糟屋左衛門尉有季居蹟 西北の方にて八幡境内より
社領の地に係り東西百間余南北百十間余四面に堀の
遺形あり（中略）此地有季の居蹟のみ伝ふれど其祖
元方糟屋庄大夫と称す以来の所領なれば世々爰に居
住せしなるべし
※愛甲熊野神社石灯籠 康暦二年（一三三〇）



『新編相模国風土記稿』

上粕屋神社



上粕屋神社



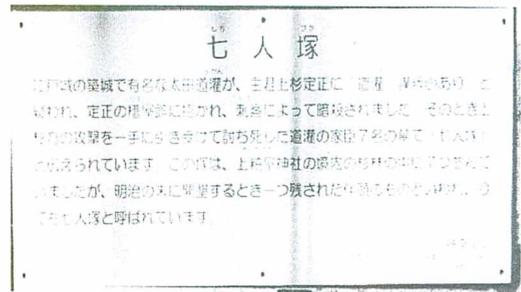
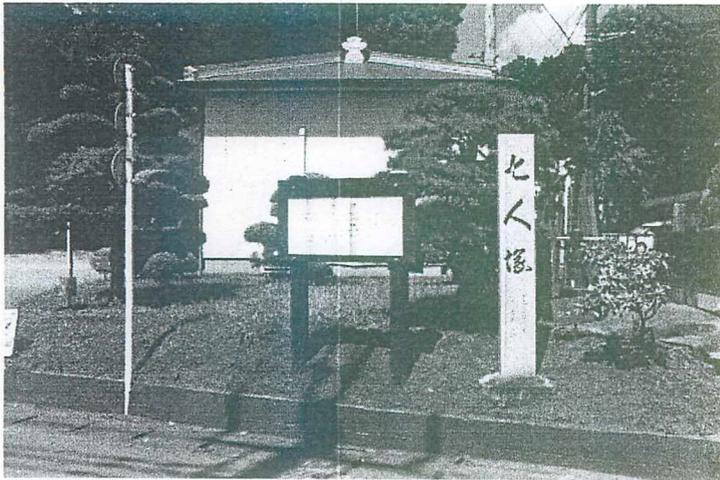
現地案内板

山王社 天平年中僧良
弁の勧請なりと云小名
山王原の鎮守なり例祭
六月廿二日毎年十二月
廿日社地に年の市立り
幣殿・拝殿・神楽殿等
あり

『新編相模国風土記稿』

太田道灌

七人塚



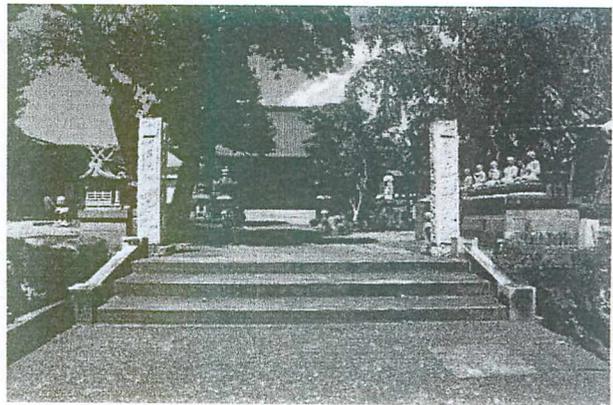
現地案内板

洞昌院

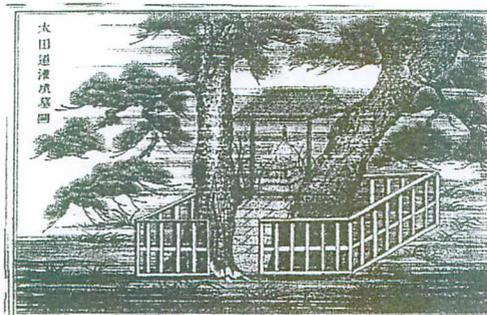
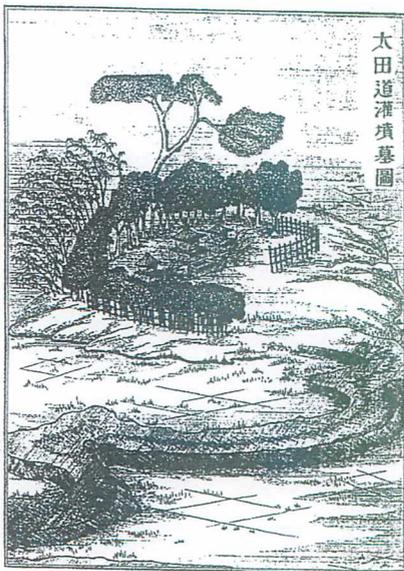
洞昌院 蟠龍山公所寺公所は寺辺の字なりと号す曹洞宗津久井縣根小屋村功雲寺末開山崇旭開基は太田左衛門大夫持資入道道灌文明十八年七月二十六日卒法名洞昌院心圓道灌なり

太田道灌墓 五輪塔高三尺五寸許傍に古松二株一は圍一丈六尺一は一丈あり按ずるに石塔の様当時の物にあらず後世建し物と見ゆ下村浅間社別当大慈寺にも道灌の墳墓あれど当院に埋葬せし事其證あり道灌は太田備中資清の子にして左衛門大夫持資初資長と称す長祿元年武州江戸及川越岩槻の城三城を築く【寛永譜】曰資長源六郎左衛門大夫剃髮して道灌と号す歌人相州の人なり文明十八年七月讒言に依て当所定正の館にして誅せられ当院に葬す【寛永譜】七月廿六日相州糟屋定正が館に入りて卒す五十五歳秋山上糟屋洞昌院に荼毘す

(『新編相模国風土記稿』)



現地案内板



太田道灌墳墓圖 (『新編相模国風土記稿所載』)
右の上柏屋洞昌院の墓は胴塚、左の下糟屋大慈寺のものは首塚と俗称される

鎌倉公方 足利義詮 (尊氏子 建武2年〔1335〕) — 基氏 (義詮弟 貞和5年〔1349〕) — 氏満 — 満兼 — 持氏 (永享11年〔1439〕)
永享の乱にて自刃・滅) — 成氏

関東管領 鎌倉公方の補佐役、上杉氏

持氏 管領を犬懸上杉氏 (上杉禅秀) から山内上杉氏 (上杉憲基) へ交代 → 上杉禅秀の乱 (応永23年〔1416〕) 翌年自刃
→ 犬懸上杉氏没落

永享の乱 將軍職をねらう持氏と6代將軍足利義教の対立 → 管領上杉憲実上野に退避 → 憲実に攻められ持氏自刃
〔義教は鎌倉公方に息子をあてようとするが、持氏残党の結城氏朝が持氏の遺児春王丸・安王丸を擁立し反発〕

結城合戦 永享12年 (1140) 上杉清方 (憲実弟) 総大将にて結城氏敗北 嘉吉元年 (1441) 4月氏朝戦死・2児は殺害されるが、
もう一人の遺児永寿王丸 (後の成氏) は生き延びる

嘉吉の変 嘉吉元年 (1441) 6月24日 赤松満祐により義教暗殺される

〔宝徳元年 (1449) 永寿王丸 (成氏) が鎌倉公方となる。管領は憲実の子の憲忠〕

江の島合戦 宝徳2年 (1450) 成氏 ⇄ 憲忠 長尾景仲・太田資清 (道真、道灌父) が成氏の鎌倉御所を攻めるも江の島で撃退さ
る → 糟屋館へ逃れる

〔憲忠は七沢山に要害を構えて (七沢城) 立てこもる〕

享徳の乱 享徳3年 (1454) 成氏が憲忠を誅す → 足利成氏 ⇄ 上杉氏の対立 → 28年に及ぶ関東の戦乱

古河公方 成氏は鎌倉に帰れず古河 (茨城県古河市) を本拠として古河公方となる

幕府は足利義政弟を送り込むが鎌倉に入れず伊豆の堀越 (静岡県韭山町) に留まり堀越公方となり抗争が続いた

文明8年 (1476) 管領山内上杉顕定の重臣長尾景春の乱により権威は失墜 → 乱を鎮めた扇谷上杉定正の家宰太田道灌により、
定正の権威は高まる → 顕定は道灌の才能が上杉に危険であると定正の猜疑心をあおり道灌は謀殺された。

以降両上杉の抗争が続くことになる

実時原の戦 長享2年 (1488) 顕定は糟屋館を制圧しようと鉢形城から1000騎で奇襲をかけるが、川越城にいた定正は200騎
でこれを追撃して、実時原で戦いとなった。顕定軍は敗走したが、七沢城 (厚木市七沢) を失った。

道灌謀殺 上杉定正糟屋館、風呂に入っているとき定正家臣曾我兵庫に斬られ「当方滅亡」と叫んで死んでいった (道灌4代子孫
資武記録)。

太田氏系図 資国 → 丹波国太田郷 (京都府亀岡市稗田町太田) に移住

道真 (資清) → 「東国不双の案者」、扇谷家執事・相模国守護代

糟屋館

① 上粕屋産業能率大学付近 → 館原 (たてっばら)、打出 (大手口)、大門、的場、馬防口 (ませぐち)、木戸、湯殿入り (浴場)、外堀 (と
ぼり)、公所 (ぐぞ)、日枝神社、白山神社、洞昌院など所在 産能大 (上杉定正館址) 昭和50年の発掘

② 下糟屋丸山城遺跡 → 室町期の城郭遺構 → 江戸期の記録「糟屋御館之跡いつの頃よりか濟家宗の寺と成大慈寺と申候」、糟屋は戦国
期下糟屋一帯のみ

万里集九 → 文明17年 (1485)、道灌の招きにより江戸城の一庵「梅花無尽蔵」に入る

『梅花無尽蔵』 → 万里集九詩文集、道灌との交遊・江戸城の様子が記される

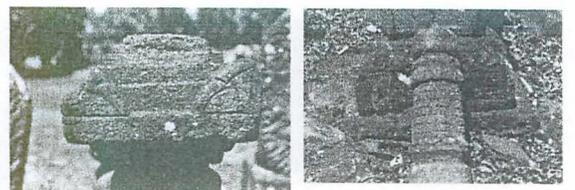


太田道灌墳墓 (洞昌院)



中世石造物群 (洞昌院)

糟屋氏一族の墓旧地から移されたものか
旧地には板碑2、五輪塔13、宝篋印塔1、卵塔5・
船形塔婆3 (近世) があった



中世石造物群の一つ 宝篋印塔

道灌墳墓とされる宝篋印塔 反花座の格狭間は2
区、線刻の複弁蓮華文、笠の隅飾突起はやや外開
き、線刻の2弧が全周する。相輪は後補。15世紀
中頃～後半か。